

「どう向き合おうか」「地球温暖化」

明日のためにじきる(じく)る(る)こと

私たちが生きているこの地球が誕生したのは、今から46億年前です。青い海と緑の大地、そして大気。生命が宿り、進化を続けてきた地球。私たちの原点であり母なる大地であるこの地球は、現在、急激な環境変化によって蝕くはまれつつあります。「地球温暖化」問題です。地球温暖化とはいったい何なのか。なぜ起こるのか。これから私たちは何をしなければならぬのか。この豊かな自然に抱かれた川根本町にあっても、決して他人ごとではありません。川根本町は「水と森の番人」としての使命を果たすため、様々な取り組みを始めています。

遠い世界の話じゃない地球温暖化という問題

「家の前の田んぼのアマガエルが減った」、「夏なのにウグイスが鳴いていた」、「秋なのにタンポポが咲いていた」、「春なのに

モミジが紅葉していた」、「寒いところに住んでいるが、朝起きて顔を洗うとき水道の水が凍らなくなった」……………。

これは、全国地球温暖化防止活動推進センターが運営する環境学習施設「ストップおんだん館」にある、子どもたちの「気づきのノート」の一部です。子どもたちは、ほんの小さな環境や気候の変化を、子どもならではの目線で的確に捉えています。

「過去100年間で、地球の温度が0.74℃上昇している。日本では約1℃、東京では約3℃も上がっている」、「日本は2008年から2012年までの間に、1990年と比べてCO₂の排出量を6%削減しなければならぬ」…。

現在ちまたでは、地球温暖化問題についての様々な情報やデータがあふれています。環境省の勧める「チームマイナス6%」がにわかに関心を浴び、買い物でのエコバッグ利用や、エコドライブなども浸透しつつあります。

環境教育を積極的に取り入れる学校なども増えてきているといえます。

南半球の島々が水没してしまうかもしれない、北極では水が溶けてシロクマの住み処がなく

なりつつある、台風が大型化している、などの目を引く話題が連日テレビで報道されています。「地球温暖化は将来の可能性ではなく、現在進行中の危機である」と。そして「原因は人間の活動によるもの」だとも。温暖化の主な原因が私たち人間の活動にあるならば、その対策もまた、私たちが行うよりほかにありません。

しかし、地球温暖化の問題をデータや概念で伝えようとしても、子どもばかりでなく、大人でさえなかなかピンとこないものです。環境教育やCO₂削減行動にしても、声高に主張したり、ただやみくもに知識を伝えるのではなく、日々の暮らしの中で楽しみながら理解していくのが、一番分かりやすいのではないのでしょうか。

今年から京都議定書の第一約束期間が始まりました。

まずは身の回りで起きていることに目を配り「これから生まれてくる子どもたちにこんな未来を残したい」と希望を持って毎日を生きることが、一番の温暖化対策なのかもしれません。

【序章】

遠い世界の話じゃない地球温暖化という問題